

成田山書道美術館蔵松井如流宛西川寧葉書からみる『書品』編集の断面(二)

前川知里

はじめに

本稿では、成田山書道美術館が所蔵する松井如流宛葉書計一二通のうち、西川寧の葉書を紹介する。西川寧の葉書は成田山書道美術館に計二〇通所蔵されているが、その一覧については表Ⅰを参照されたい。表Ⅰは消印の年代順に筆者が作成した表である。拙稿「成田山書道美術館蔵松井如流宛西川寧葉書からみる『書品』編集の断面」(『書道学論集』16号、大東文化大学院書道学専攻院学生会、平成三十一年)では表Ⅰのうち、資料番号1から10までを紹介したが、本稿では資料番号11から20までを紹介する。このうち資料番号3は消印が判読できず、正確な日付が不明である。しかし、宛先の松井如流の住所が練馬区となっている点、押されている消印が昭和二十八年以前に使用されていたものである点、内容が『書品』一四号に掲載されている「成都西楼帖」についてのものである点から昭和二十六年の葉書と判断し、資料番号3に位置付けた。

これら二〇通の主な内容は『書品』誌についてのやり取りである。『書品』の概要については、拙稿「成田山書道美術館蔵松井如流宛西川寧葉書からみる『書品』編集の断面」を参照されたい。

本稿では、松井如流宛西川寧葉書を紹介することによって、『書品』編集の断面を明らかにしたい。

【表Ⅰ】

| 松井如流宛西川寧葉書一覧 | | | |
|--------------|-------------|----|-------------|
| 番号 | 消印 | 番号 | 消印 |
| 1 | 昭和25年5月4日 | 11 | 昭和29年11月8日 |
| 2 | 昭和25年12月23日 | 12 | 昭和29年12月13日 |
| 3 | 昭和26年3月4日 | 13 | 昭和29年12月23日 |
| 4 | 昭和27年1月14日 | 14 | 昭和30年2月28日 |
| 5 | 昭和27年8月28日 | 15 | 昭和30年3月14日 |
| 6 | 昭和27年9月25日 | 16 | 昭和30年5月2日 |
| 7 | 昭和28年9月14日 | 17 | 昭和33年1月7日 |
| 8 | 昭和29年1月26日 | 18 | 昭和38年3月11日 |
| 9 | 昭和29年2月25日 | 19 | 昭和39年7月14日 |
| 10 | 昭和29年3月20日 | 20 | 昭和40年7月16日 |

本章では、表Iの資料番号11から20について紹介する。以下、凡例を示す。

【凡例】

- ・ 翻刻の改行は原則として原文に従っている。
- ・ 翻刻の漢字の表記は原文に従っている。
- ・ 翻刻の句読点は原文に従って表記している。
- ・ 追加や文字の転倒などは記号に従って本来の位置に配している。
- ・ 判読できない文字については■で示している。
- ・ 各資料は次に掲げる項目をこの順に示している。

〔資料番号〕 表Iの通し番号

〔裏面図版〕

〔表面図版〕 書信が表面にある場合にのみ図版を掲載した

〔消印〕

〔種類〕 墨書かペン書かを示した

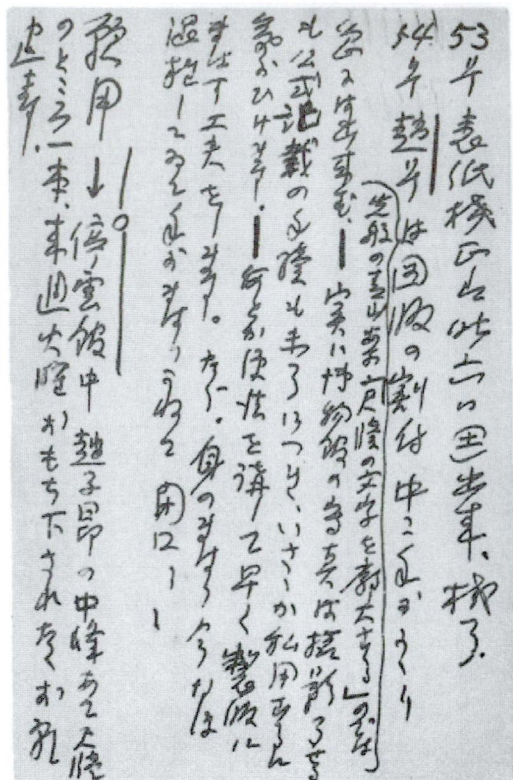
〔裏面翻刻〕

〔表面翻刻〕

〔補考〕 葉書内容についての補考等

〔資料番号〕 11

〔裏面図版〕



〔消印〕 昭和二十九年十一月八日

〔種類〕 ペン書

〔裏面翻刻〕

53号表紙校正は昨六日(土)出来、校了。

54号題号は先般の青山案「尺牘の文字を廓大する」のでは図版の割付中々手がかり

急には出来ず。—実ハ博物館の寫真は撮影了せる

も公式記載の手續も未了につき、いさゝか私用するに

気がひけます。—何とか便法を講じて早く製版に

まはす工夫をします。たゞ、身のまはり今なほ

混雑してゐて手がまはりかねて閉口々々

願用↓停雲館中趙子昂の中峰あて尺牘

のところ一本、来週火曜おもち下されたくお願
申上ます。

〔表面翻刻〕

練馬区関町五乙―231

松井如流様

十一月七日

中目黒四ノ一四四五

西川寧

〔補考〕

書面中に「54号趙号」とあるが、五五号の間違いではないかと考えられる。
『書品』五五号では「續趙之謙集」が組まれている。前回の趙之謙特集は『書品』
二五号で組まれており、その関係で「續」となったのであろう。昭和二十九年九
月四日から三十日までの期間に東京国立博物館で「趙之謙歿後七十年記念展」が
開催されており、その関連で『書品』誌上において特集が組まれた。西川寧は当
時、東京国立博物館の研究員を務めており、従って、文中の「博物館」は東京国
立博物館を指すと考えられる。また、書面中に登場する青山は青山杉雨を指す。
当時、『書品』の編集にも携わり、『書品』五五号掲載の「趙之謙を語る」座談会
にも出席している。

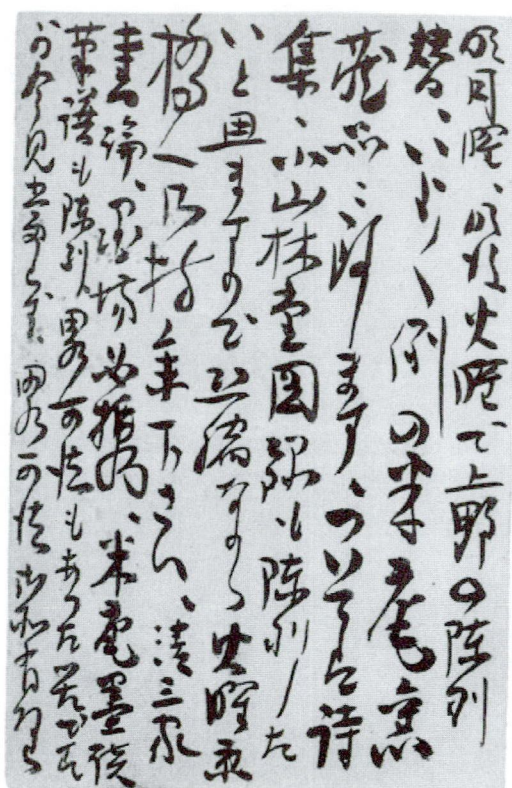
「停雲館」とは『停雲館法帖』を指すのであろう。趙子昂の「與中峰明本尺牘」
は『停雲館法帖』巻之八に収録されている。

東京国立博物館では昭和二十九年十一月二日に河出書房「定本書道全集」発
行記念展を開催している。この展覧会の出品目録は不明であるが、「定本書道全
集」宋・元（昭和三十年）には原寸大折込に「與中峰明本尺牘」の図版が掲載さ
れている。また、「定本書道全集」宋・元には西川寧の「元朝の書」という論考
が掲載されていることから、松井如流から借用した資料が、こうした論考を執筆
する場面で使用されていた可能性が指摘できるのである。

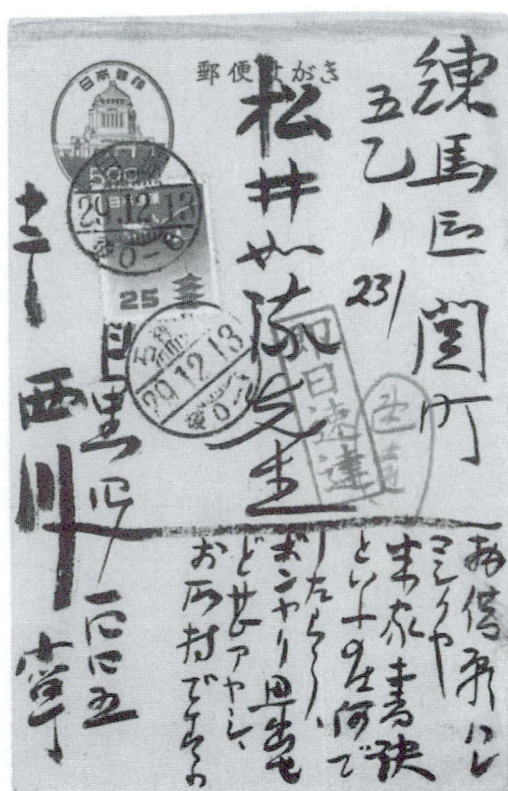
〔資料番号〕

12

〔裏面図版〕



〔表面図版〕



〔消印〕 昭和二十九年十二月十三日

〔種類〕 墨書

〔裏面翻刻〕

明月曜、明後火曜で上野の陳列

替、いよゝ例の米庵舊

藏品に致します。ついでには詩

集・小山林堂図録も陳列した

いと思ますので恐縮ながら火曜京

橋へ御持参下さい。清三家

書論、墨場必携、米庵墨談

筆譜も陳列、畧可法もあつた筈です

が今見當らず。畧可法御所有なら

〔表面翻刻〕

練馬区関町

五乙ノ231

拝借願ハレ

マシクヤ

米家書訣

松井如流先生

といふのは何で

したらう。

ボンヤリ思出せ

目黒四ノ一四四五

ど甚アヤシ。

十二日 西川寧

お所持ですか

〔補考〕

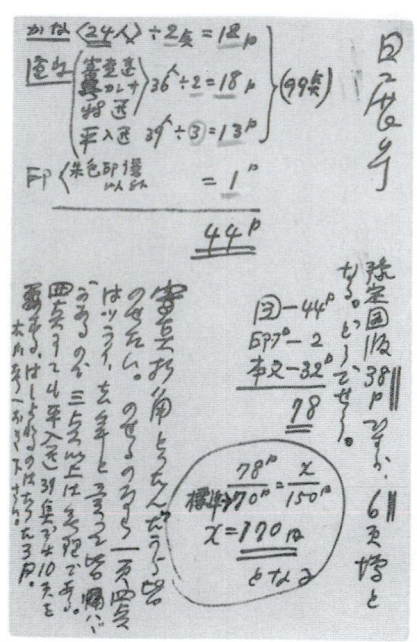
西川寧は昭和二十二年から昭和三十七年までの期間、東京国立博物館調査員を務めているが、これはその間の展示である。市河米庵の所蔵品の展覧会では、中国の宋、元、明、清時代の真跡に加え、米庵自身の筆跡並びに著作が展覧された。当時の『国立博物館ニュース』第九十号では、「米庵はわが書道史の上で何といつても大きい存在であり、とかくこの人の忘れられがちな当分、ここに改めてその業績を回顧するよすがとなる此の展覧は、一つの意味を持つものである」と紹介されている。

『西川寧著作集』第七巻、六二九頁にはこの展覧会のための原稿が掲載されている。そこには、「彼の蒐集品の大部分は明治時代に市河三兼・三鼎氏から本館に寄贈された。今そのほんの一部をここに展覧して米庵の遺業をしのぶこととして」として、『詩集』、『墨場必携』、『米庵墨談』、『小山林堂書画文房図録』、『畧可法』、『清三家書論』、『米庵藏筆譜』がその展覧物として列挙されている。このうち、『詩集』、『小山林堂書画文房図録』、『畧可法』は、松井如流の藏品が展示された可能性がこの書面中から読み取れる。

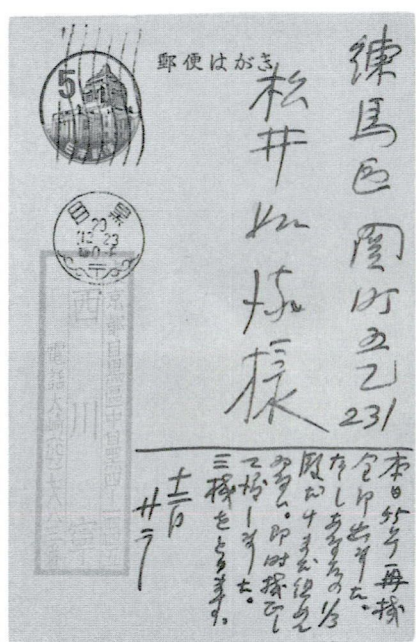
このように、西川寧と松井如流の交流は、『書品』から派生して、その他の書学にまつわる談議や本の貸し借りなどに及んでいったといえるのではないだろうか。

〔資料番号〕 13

〔裏面図版〕



〔表面図版〕



〔消印〕 昭和二十九年十二月二十三日
〔種類〕 ペン書

〔裏面翻刻〕

日展号

| | | | | | | | | |
|-----|--|-------|-----|-----------------|-----|----|-----|---------------|
| かな | <24人> ÷ 2点 = 12p | } 99点 | | | | | | |
| 漢字 | <table border="0"> <tr> <td>審査員</td> <td rowspan="3">} 36人 ÷ 2 = 18p</td> </tr> <tr> <td>カンサ</td> </tr> <tr> <td>特選</td> </tr> <tr> <td>平入選</td> <td>39人 ÷ 3 = 13p</td> </tr> </table> | | 審査員 | } 36人 ÷ 2 = 18p | カンサ | 特選 | 平入選 | 39人 ÷ 3 = 13p |
| 審査員 | } 36人 ÷ 2 = 18p | | | | | | | |
| カンサ | | | | | | | | |
| 特選 | | | | | | | | |
| 平入選 | 39人 ÷ 3 = 13p | | | | | | | |
| 印 | 朱色印譜以外 = 1p | | | | | | | |
| | | 44p | | | | | | |

豫定図版38pですが、6頁増となる。どうでせう。

図—44p
印プ—2p
本文—32p
78

写真折角とつたんだから皆のせたい。のせるのなら一頁四点はツライ。去年と異って皆ハッがあるもので三点以上は無理である。四点にしても平入選39点では10頁を要する。はしよれるのはたつた3p。右御考へおき下さい。

〔表面翻刻〕

練馬区関町五乙 231

松井如流先生

本日55号再校

全部出ました。

た、しあなたの1/3

段だけまだ組めて

ゐない。即時校正し

て渡しました。

東京都目黒区中目黒四一四四五

三校をとります。

西川寧

十二月

電話大崎(49)七八八三番

廿二日

〔備考〕

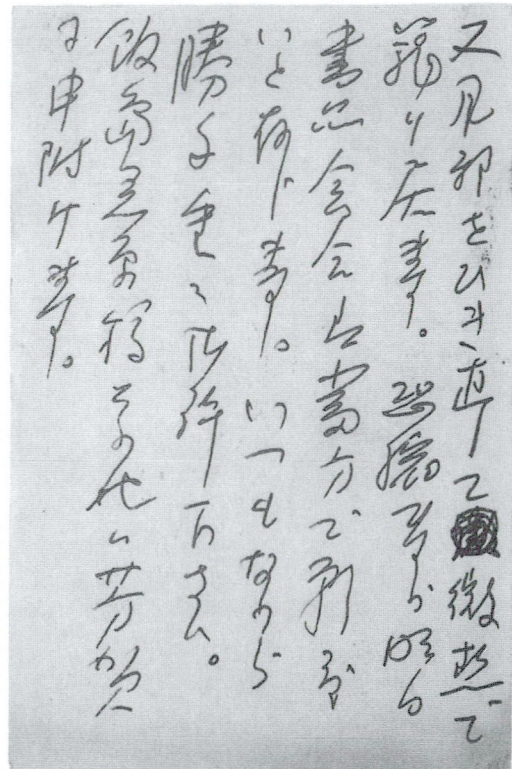
『書品』五六号において「第十回日展集」が組まれているが、この号の打ち合わせである。この葉書に象徴されるように、西川寧は綿密な割付を行っていたようである。『書品』五六号では、図版は審査員、無鑑査、特選、入選を問わず、二点一頁で掲載された。印は朱色印譜が二頁、白黒印譜が二頁にまとめられている。結果的に、図版を大きく見せる方法が採用されたようである。

『書品』五五号、六五頁の1/3段に、松井如流「二つの流」という論稿が掲載されており、表面記載の「あなたの1/3段」とは、これを指していると考え、差支えないだろう。

〔資料番号〕

14

〔裏面図版〕



〔消印〕 昭和三十年二月二十八日

〔種類〕 ペン書

〔裏面翻刻〕

又風邪をひき直して微熱で籠り居ます。恐縮ですが明日書品会合は當方で願度いと存じます。いつもながら勝手重々御許下さい。

飯島君原稿その他は芳賀

〔消印〕 昭和三十年五月二日

〔種類〕 ペン書

〔裏面翻刻〕

明三日座談会は夜とばかり思ひこみ、や、早目にお目にか、り度いと申しましたが、四時とあつては、例のお禮まはりの為、早く行けません。開会前御相談の件は取消しに願います。右要件のみ取急ぎ

〔表面翻刻〕

練馬区関町五ノ231

松井如流様

五月二日

東京都目黒区中目黒四―一四四五

西川寧

電話大崎(49)七八八三番

〔補考〕

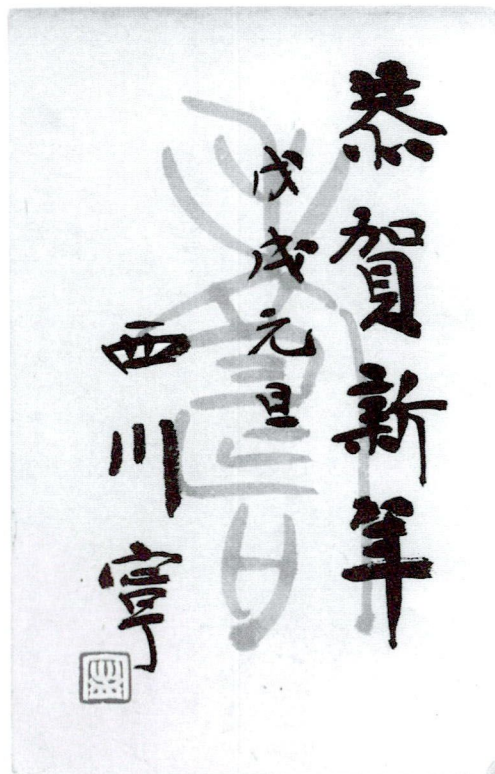
五月三日に行われた座談会は、『書品』六一号から六二号にわたって掲載された「昭和初期の書道界―座談会―」を指すと考えられる。司会を青山杉雨が務めており、出席者は手島右卿、平尾孤往、上田桑鳩、柳田泰雲、松井如流、西川寧

の六名であった。

座談会の前に松井如流と西川寧は相談する約束をしていたようである。昭和三十年二月二十八日の日本芸術院総会において西川寧の第十回日展出品作である「隸書七言聯」が日本芸術院賞を受賞することが決まったが、「例のお禮まはり」とはそれを指しているのだろうか。何にせよ、この葉書で西川寧は「例のお禮まはりの為」に座談会開会前の約束の取り消しを申し出ている。

〔資料番号〕 17

〔裏面図版〕



〔消印〕 昭和三十三年一月七日

〔種類〕 墨書

〔裏面翻刻〕

恭賀新年

戊辰元旦

西川寧

〔表面翻刻〕

練馬区関町五ノ二三一

松井如流先生

中目黒四ノ一四四五

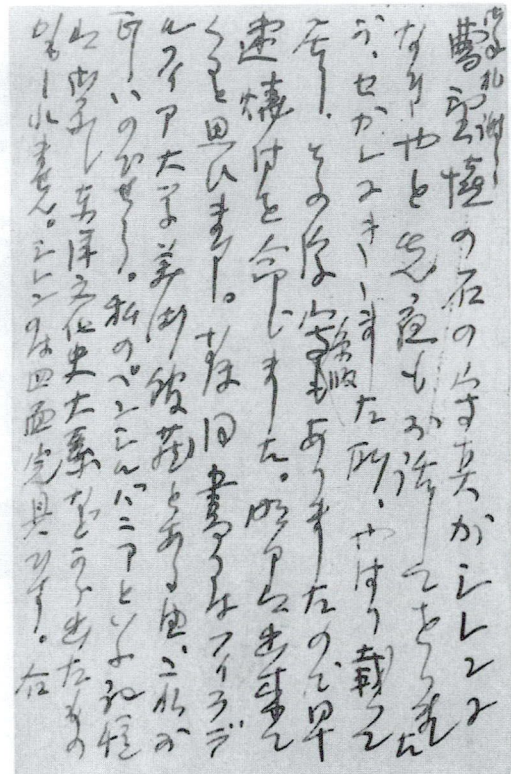
〔補考〕

西川寧から松井如流に宛てられた年賀状である。普段、ペン字の葉書を送る事が多かった西川寧であるが、年賀状は墨書していたようである。背面には朱墨で「壽」の一字が篆書体で書写されている。

〔資料番号〕

18

〔裏面図版〕



〔消印〕 昭和三十八年三月十一日

〔種類〕 ペン書

〔裏面翻刻〕

御手紙謝々

曹望愷の石の寫真がシレンに

なきやと先夜もお話してをりました

が、セガレにき、ました所、やはり載って

居り、その復寫原版もありましたので早

速焼付を命じました。明日は出来て

くると思ひます。なほ同書にはフィラデ

ルフィア大学美術館蔵とある由、これが

正しいのでせう。私のペンシルバニアといふ記憶

は御なし東洋文化史大系などから出たもの

かもしれません。シレンには四面完具です。右

〔表面翻刻〕

練馬区関町五ノ二三一

松井如流様

三月十日

東京都目黒区中目黒四一四四五

西川寧

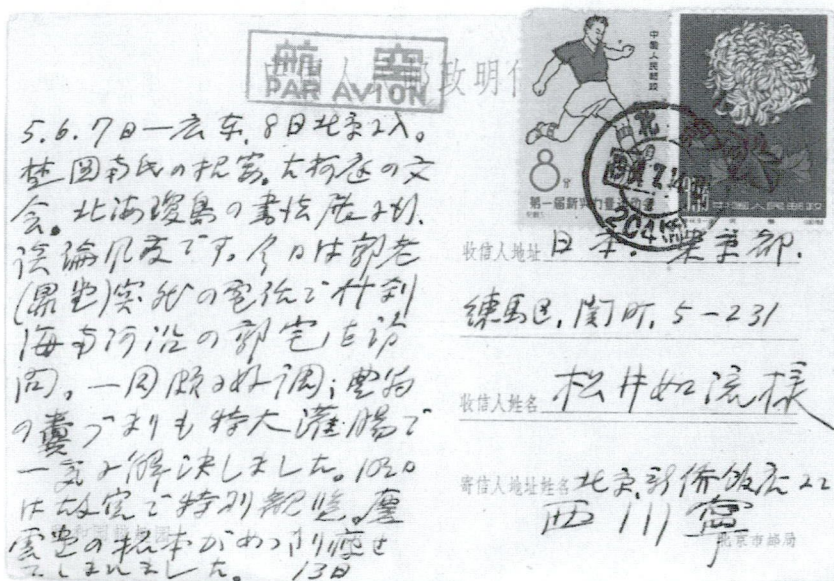
電話目黒(712) 七八八三番

〔補考〕

『書目』一三七号において、「蘇孝慈墓誌銘」の特集とともに、「曹望愷造像」の特集も組まれている。同号には松井如流「北魏・曹望愷造像」の論考も掲載されている。この論考の中には、曹望愷造像の原石について「フィラデルフィア大学美術館に蔵せられて」といふ記載がある。また、如流は「戦前刊行の東洋文化史大系「漢魏六朝時代」にこの石の写真が載っており」と言及しており、この葉書の話とも共通する。

〔資料番号〕 19

〔表面図版〕



〔消印〕 昭和三十九年七月十四日

〔種類〕 ペン書

日本 東京都
練馬区、関町、5-231
松井如流様
北京、新脩飯店22
西川寧

5. 6. 7日一広東、8日北京に入。
楚図南氏の招宴。古河庭の文
会。北海瓊島の書法展に行、
談論風発です。今日は郭老
(鼎堂) 突然の電話で什利
海南河沿の郭宅を訪
問。一同頗る好調。豊翁
の糞づまりも特大灌腸で
一気に解決しました。明日
は故宮で特別観覧。慶
雲堂の拓本がめっきり痩せ
てしまひました。 13日

昭和四十年七月二十日から八月二日の期間、北京展覽館を会場に「日本豊道春海書法展観」が開催された。これは、中国人民対外文化協会からの招請によつて実現した。上海では八月十五日から十日間、上海博物館を会場として催さ

れ、広州では九月十三日から十日間、中山公園の文化館を会場に開催された。この展覧会の開催にあつて四名が招待されているが、そのメンバーは豊道春海、息子の豊道和雄、交流協会事務局次長の村岡久平、そして西川寧であつた。

六月三十日、神田の学士会館において「豊道春海氏訪中歓送会」が開催された。そして訪中メンバー一同は、七月四日に東京を出立し、広州で三日間を過ごした後、八日に北京へ入った。しかし、船便で出した展観作品が予定通りに着かず、十四日に会場である北京展覽館を検分し、十六日に荷とき、二十日に開幕式を迎えたことが『書品』一六四号において述べられている。西川寧たちはその後、会場を展観した後、二十五日に帰国している。

書面中に登場する楚図南は、学者であり、「日本豊道春海書法展観」の開会式の際、開会の辞を述べた人物である。さらに豊道春海は開幕式の夜に北京飯店で祝賀宴が催された際、楚図南に作品をプレゼントしており、交流が見られる。

七月十三日に一同が訪れた什利海南河沿の郭沫若宅は、現在、北京郭沫若記念館となっている場所である。郭沫若は「日本豊道春海書法展観」記念の小冊子の題を書いている人物である。また小冊子巻頭には郭沫若の献辞が掲載されたようであるが、『書品』一六四号に転載されており、その姿を確認することができる。

「明日は故宮で特別観覧」とあるが、同号『書品』によると、十四日は展覧会場である北京展覽館を検分しており、前後は定かでないが、故宮博物院と北京展覧館に訪れていたことがわかる。

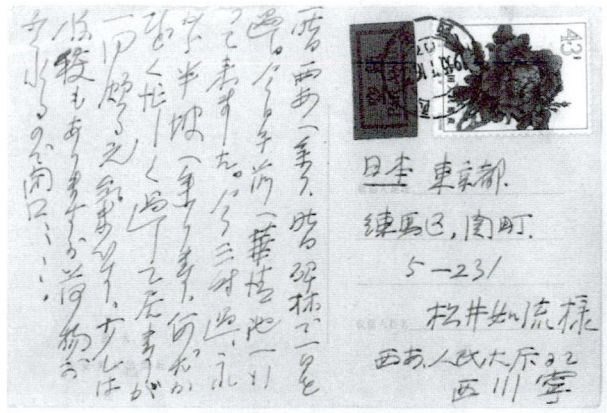
そして帰国後の八月二十九日、半蔵門の金剛飯店において「豊道春海先生帰国歓迎報告会」が開催されており、これらの訪中の様子はそこで報告されたようである。

〔資料番号〕 20

〔裏面図版〕



〔表面図版〕



〔消印〕 昭和四十年七月十六日

〔種類〕 ペン書

〔裏面翻刻〕

ま、こ、こ、にとまり

ました。この棟

の後の別棟の

四階です。

宿から大雁
塔が見えて
ゐます。

〔表面翻刻〕

日本 東京都
練馬区、関町
5-231
松井如流様

西安、人民大厦に
て
西川寧

一昨日西安へ参り、昨日碑林で一日を
過し。今日午前へ華清池へ行
つて来ました。今三時過、これ
から半坡へ参ります。何だか
ひどく忙しく過して居ますが
一同頗る元気です。少しは
収穫もありますが荷物が
ふくれるので閉口々々

〔補考〕

昭和四十年、中華人民共和国対外文化協会
の招聘によって、第四次訪中書道代表
団が中国を訪れることとなった。西川寧は
団長として訪中しているが、これはその
際の葉書である。昭和四十年六月二十九
日に市ヶ谷の私学会館で壮行会が催

され、一同は七月一日に中国へと渡った。書面中に、「一昨日西安へ参り、昨日碑林で一日を過し」とあることから、七月十四日、西安に訪れ、十五日に陝西省博物館にて一日を過ごしていたことがわかる。『書品』一六五号には、大成殿基壇上において武伯綸館長と共に撮影した写真が掲載されているが、おそらく十五日に撮影されたものであろう。十六日に行つたとされる華清池とは楊貴妃が湯浴みしたことで知られる華清宮であり、半坡とは西安市に存在する半坡遺跡のことであろう。『書品』一六四号によると、七月三十日に第四次訪中書道代表団は帰国しており、従つて一同は約一カ月間中国に滞在していたことになる。

『書品』一六四号で特集された「元禎墓誌銘」は、西川寧が昭和三十六年に第二次訪中書道代表団として訪中した際に新獲した資料であるが、このように西川寧は訪中することによって新資料を入手していたようである。葉書終盤にある「少しは収獲もあります」という一文は、こうした新資料の収獲を指していたのではないだろうか。

帰国後の九月から十月にわたつて、東京、大阪、北九州の三地域にて「中国二千年の美」展と題し、西安碑林の拓本が展観された。これを受け『書品』一六五号では「西安碑林拓本展」の特集が組まれているが、ここには陝西省博物館内部の写真が何点か掲載されている。これらの写真は、西川寧が中国滞在中に撮影したものかもしれない。「中国二千年の美」展は以前より計画されていたものであり、第四次訪中書道代表団との関連は定かでない。西川寧はこの展覧会開催にあたって尽力していたが、こうした訪中の経験もまた活かされていたであろうことは想像に難くない。

おわりに

ここまで、二稿にわたつて、成田山書道美術館蔵松井如流宛西川寧葉書を紹介してきた。それらの主な内容は『書品』編集に関するものである。西川寧は『書

品』編集主幹を務め、松井如流もまたその編集に携わっていた。『書品』編集に關しては、これまで西嶋慎一の論考や『書品』記念号における各編者の回顧録、さらに『書品』巻末に掲載されている「書品後語」などにおいて僅かに語られているのみである。従つて、今回葉書を紹介したことによって、『書品』編集のよりリアルな姿が確認できたといえる。

『書品』の編集会議は毎週火曜日に京橋の事務所で開催されていたが、編集会議以外の場面においても西川寧や松井如流を始めとする「編集室」のメンバーは、『書品』編集に尽力していた。資料番号1では、「校正は五日出ることになりました。五日夜當方で初稿を済ませるつもり」と、西川寧が自宅にて初稿を済ませていた様子がみえる。この他にも、資料番号2には「岩瀬君図版ゲラを持来り、全部完了」とあり、火曜日の編集会議以外の場面においても多くの作業を行っていたことがわかる。このように『書品』の編集業務はタイトなスケジュールで執り行われていたといえる。

さらに西川寧は図版の割付なども担当することがあり、資料番号13からは、いかに苦心して図版割付などの作業にあたっていたかが窺えよう。こうした図版のゲラや校正に関する業務は、松井如流が担うというよりも、むしろ西川寧が中心となつて、印刷業者と連絡をとっていたようである。また、資料番号1の書面中にある「雨海氏どうやら落第点です」という一文からわかるように、『書品』に掲載される論考は西川寧の眼を通過したものであつたといえる。加えて、資料番号10には「元永本だけでいくことは先夜も御話した通りたしかに一案です」とあるが、『書品』誌の特集内容は各編集者の意見を聞きながら、西川寧が最終的な決定を下していたであろうことが想像される。

また、これらの葉書を概観すると、西川寧と松井如流の交流は『書品』編集のみに留まらない。資料番号3の「成都西楼帖」に関する談義に象徴されるように、『書品』を編集するにあつたの書道談義の他、資料番号11のような『定本書道全集』に関する資料の貸し借り、資料番号12のような東京国立博物館

の展示品に関する文物の貸し借りなど、様々な交流があったといえる。周知の通り、昭和三十三年から刊行が始まった『書跡名品叢刊』には、松井如流、西川寧の双方が深く関わっている。両者は『書品』編集を行う過程で、互いに書道史家として認め合い、信頼関係を築いていたともいえる。

また資料番号1からは、西川寧が松井如流の主宰する朝聞書会展を観覧する約束をしていたことがわかる。自明のことだが、このように作家としての交流も両者の間には存在している。

『書品』は書道研究雑誌として、また同時代作家をクローズアップした雑誌として著名であり、この時代を代表する書道雑誌の一つである。西川寧の弟子であり、これらの葉書にも登場する青山杉雨は、昭和三十一年から書道雑誌『近代書道グラフ』を刊行しているが、そこには『書品』編集で培ったノウハウが詰め込まれている。

『書品』は刊行から数年が経って、全巻揃えるのは難しいと言わしめるほどの人気雑誌となった。今回、これら一群の葉書を調査することによって、西川寧の編集や書道史研究に対する真摯な姿勢が垣間見えた。こうした西川寧、松井如流を始めとする編集スタッフの並々ならぬ努力によって、『書品』は戦後の書道界を彩る書道雑誌となり得たのである。

注

(1) 『書品』の編集室『五十年の回顧 ある書道編集者の軌跡』(平成二十四年、芸術新聞社) 参照。